



臨床糖尿病支援ネットワーク MANO a MANO



“mano a mano”とはスペイン語で“手から手へ”という意味です

コロナ下にあっても進歩する糖尿病治療

【当法人理事】

東京都立多摩総合医療センター

西田 賢司 [医師]

新型コロナウイルス感染症が猛威をふるい始めて1年半以上経ちました。現在日本では第5波が収まってきてなんと東京では今年最少となっています。なんとも不思議な感じですが、これで完全に収まるのか、あるいは諸外国で起こっているように次の波が来るのか現時点ではわからず、来るならいつ来るのかわからないこともあわせてなかなか安心できない状況が医療者には特に厳しいところかと思えます。皆様もさぞ苦労されていることかと存じます。

さてそのような中でも糖尿病の分野では次々と新薬が登場しています。インクレチン関連薬では、新しいGLP-1アゴニストが注射薬だけではなく、経口薬も発売となり、治療の選択肢が増えてきていることは非常にありがたいことです。GLP-1アゴニスト週1回のもは、超高齢化社会にあつて自己注射が困難な患者さんに応用できることが大きな利点の一つです。また、経口薬は注射になじまない患者さんにも良いですが、自己注射管理料が不要なことから費用負担の軽減も見込まれます。さらに、今まで注目度が低かったGIPの作用も併せ持つデュアルGIP/GLP-1受容体作動薬の臨床治験も進行中で、GLP-1単独アゴニストより良い結果が期待されています。

一方、やはりインスリンは基本的治療薬として欠かせませんが、このところ超超速効型とでも呼ぶべき薬剤が相次いで上梓されています。こちらも患者さんに合わせた選択が可能ですが、使い分けという点では今後まだまだ経験・検討が必要でしょう。GLP-1アゴニストとの合剤も数種類出てきており、両方併用が望ましい患者さんには注射が1回で済むことは福音です。なお、米国では1週間持続するような基礎インスリンも開発中のようで、高齢化していく1型糖尿病患者さんへの応用が期待されます。

経口薬では、イメグリミンが発売になりました。全く新しい作用機序の薬剤で、ミトコンドリア機能を改善することで膵β細胞のインスリン分泌改善、骨格筋細胞のインスリン感受性改善、肝細胞の糖新生抑制などが期待できるようです。まだ出たばかりで、実際に使ってみての効果などはこれからですが、まずは他の薬剤で手詰まりになっている患者さんに効果が上がると良いかと思っています。

このように次々と新しい糖尿病治療薬が出てきて、昔話をするまいと思いつつも、私の卒業した35年前はインスリンと内服は実質SU薬しかなかったことを思うと隔世の感があります。これからも新しい治療薬・治療法の開発が相次ぐことでしょう。それらの情報に溺れないようにしながらもどんどん取り入れて、患者さんのために役立つ医療を提供できるよう、当法人も努力してまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。まだまだ新型コロナウイルス感染症には油断できませんが、皆様のますますのご発展を祈念して巻頭言とさせていただきます。

読んで
単位を
獲得しよう

西東京糖尿病療養指導士(LCDE)は、更新のために5年間に於いて50単位を取得する必要があります。本法人会員は、会報「MANO a MANO」の本問題及び解答を読解された事を自己研修と見做し、**1年につき2単位**(5年間で10単位)を獲得できます。毎月、自分の知識を見直し、日々の療養指導にお役立てください。

(「問題」は、過去のLCDE認定試験に出題されたものより選出、一部改変しております。)

問題 運動前の補食について誤っているのはどれか、2つ選べ。

(答えは3ページにあります)

1. 血糖値の変動が大きい場合に行う
2. 指示エネルギー量の範囲外で摂取する
3. ブドウ糖や砂糖などが適する
4. チーズやクッキーなどが適する
5. 果物が適する



報告

臨床糖尿病支援ネットワーク 第70回例会

日時: 令和3年9月13日(月)
オンライン

[当法人理事] 当番幹事 吉元医院 吉元 勝彦 [医師]

70回目を迎えた例会は2021年9月13日(月)、「糖尿病在宅支援の新しいかたち～糖尿病在宅患者の療養・介護支援ガイドの活用法～」というテーマのもとオンラインで開催されました。例会として糖尿病患者の在宅医療に触れるのは初めてであり、当日は138名と大変多くの方が参加されました。さらに一般の方の申し込みが29名(通常は2～3名とのこと)であったということは、やはり在宅医療に対する関心の高さが示されたのだと思います。

当日は2つの基調講演とパネルディスカッションが行われ、講演1として武蔵野赤十字訪問看護ステーションの豊島 麻実先生から「糖尿病在宅医療の現状と課題～訪問看護から垣間見えたこと～」という演題でお話し頂きました。訪問看護という在宅医療の最前線から得られる現状と課題について実際の症例ベースでの紹介があり、気づかされる点が多くありました。また、多職種間で情報を共有することの重要性についても再認識させられました。

講演2は大和調剤センターの森 貴幸先生から「糖尿病在宅患者の療養・介護支援ガイドでできること」として、このガイドブックを発案、作成された立場からお話し頂きました。特に在宅を行う上で重要なのは医療と介護の連携であり、その関係性を作る上でのマニュアルの必要性と活用法について説明頂きました。

そして「糖尿病在宅支援の未来を語る」というパネルディスカッションでは、豊島先生、森先生、中島内科クリニックの中島 泰先生、東村山市南部地域包括支援センターの主任ケアマネジャーである細江 学先生をパネリストに、活発な発表と討論がなされました。特に各職種間で円滑な連携を進めるためには顔が見える関係を構築することが必要で、そのことが結果として在宅患者さんのQOLの向上に繋がる等のお話があり、やはりチーム医療の重要性を再認識しました。最後に、総合司会・座長をお願いした住友 秀孝先生、開会の辞を述べて頂いた植木 彬夫先生、閉会の辞として会をまとめて頂いた近藤 琢磨先生、そして例会に参加して頂いた皆様に感謝致します。

報告

第25回糖尿病療養担当者のためのセミナー

日時: 令和3年9月27日(月)
オンライン

[当法人理事] 代表世話人 医療法人社団ユスタヴィア 宮川 高一 [医師]

糖尿病とCOVID-19をテーマに、Webexオンラインシステムを利用し、医師・メディカルスタッフを合わせ、125名の方々に参加いただき、開催することができた。

特別講演1では、東京医科大学八王子医療センター 感染症科 教授の平井 由児先生をお招きし、『糖尿病→感染症・感染症→糖尿病』という演題で分かりやすくご講演いただいた。糖尿病は感染症の入り口で、感染症は糖尿病の入り口であることから、外来でのキーワードとして、水(脱水の改善)・飯(ご飯をしっかり食べる)・足(血栓の予防)の3点をしっかり改善することが大切だと解説して下さった。

特別講演2では、高村内科クリニックの植木 彬夫先生より、『日常診療から感じるコロナに対応する患者への対応』という演題でご講演いただいた。コロナ渦でワクチン接種の予約をしようと、350回以上も電話を掛けたが繋がらず、予約を諦めた患者さんのエピソードの話があった。このことを踏まえ、コンプライアンスからアドヒアランス、そしてコンコーダンスという考え方について解説いただいた。このコロナ禍によって患者さんを家族のようにしっかりと知り、対応していきましょうというコンコーダンスという考え方の重要性が認識されるようになってきた。従来のように、治療を守ってくださいというコンプライアンスの考え方から、選ぶのはあなたであるというアドヒアランスの考え方にシフトして行き、そして医療者が患者さんと一緒に選ぶ治療であるとするコンコーダンスの考えが現在は重要度が増してきている状況である。その為には、医療者が正しい情報や知識をしっかり持ち、それを伝えることで患者さんに納得いただくことが必要であると講演いただいた。

シンポジウムでは、2題の特別講演を踏まえて、多職種の役割者からコロナ渦での糖尿病診療や療養指導について各々の考えや取り組みに活発な討議が行えた。職種や所属施設、エリアを越えてこのような意見交換が行えたことは参加者の皆様の今後の一助になるものと考えます。





第26回日本糖尿病教育・看護学会学術集会

令和3年9月18日(土)～19日(日)

Web開催

東海大学医学部付属八王子病院

高松 千織 [看護師]

今年の日本糖尿病教育看護学会は、会場とWebのハイブリット開催の予定でした。しかし新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、Webのみの開催となりました。久々に糖尿病看護を頑張っている仲間に出会えることを楽しみにしていましたが、今年もそれは叶わず、次の機会のお楽しみとなりました。

今回私が拝聴した講演は、京都大学大学院医学研究科 任 和子先生の「糖尿病看護においてAPCを考える」です。ACPはAdvance Care Planning(アドバンス・ケア・プランニング)の頭文字をとったもので、人生の最終段階の医療・ケアについて、本人が家族や医療・ケアチームと事前に繰り返し話し合うプロセスのことである、とされています(厚生労働省、2018、「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」解説編より)。

糖尿病は生活習慣に関連している病気ですが、ガンや心疾患のように死を強く連想するイメージはありません。実際、糖尿病患者の死因第1位は悪性新生物38.3%、第2位は感染症17.0%、第3位血管障害(慢性腎不全、虚血性心疾患、脳血管障害)14.9%となっています(糖尿病ネットワーク、日本糖尿病学会「糖尿病の死因に関する調査委員会」による調査2017年4月より)。人生最終手段の医療・ケアに、糖尿病看護はどのような切り口で介入していくのか、そんな思いで拝聴しました。これを読んでくださっている皆さんは、普段、医療を提供する中でAPCについて考える機会はありますか？実際に実践されている方はどれくらいいらっしゃいますか？ACPは倫理的側面が大きいので、私自身は介入がとても難しいと感じています。

任先生は、日本におけるAPCで文化的に配慮すべきことについて、推奨事項として1. 患者さんを中心としたアプローチに家族を含める。日本の医療において、家族は最初から参加者として扱われる、医療従事者は家族の調和を保ちつつ患者中心のアプローチを大切にする必要がある。2. あいまいさを排除するために、社会的な認知度を高め法律を制定する。家族を中心とした文化のため、家族の希望が患者の希望よりも重視される傾向がある、日本ではAD(アドバンス・ディレクティブ:事前指示)は法的効力を持たず、最終的に患者の意向が尊重されるとは限らない、と解説しています。さらに、糖尿病看護においては介入の時期が難しく、糖尿病を持つ人がガンや腎不全、透析、認知症などが重なったときにAPCを考えることを突き付けられると述べています。糖尿病看護にたずさわる者が糖尿病を持つ人のAPCについて葛藤する状況を話し合い、ベストな対応を検討することで知見を積み重ねることが重要である、と講演を締めくくっています。

死は遅かれ早かれどの人にも、もちろん私自身にも必ず訪れます。まだまだ学びの途中ですが、経験知を重ね、患者さんの人生の最終段階に関わることのできる看護師に成長していきたいと思います。



読んで
単位を
獲得しよう

答え 3, 5 下記の解説をよく読みましょう。

(問題は1ページにあります。)

解説 1. ○ 補食とは、血糖変動が大きい場合や強い運動など実施した時に低血糖対策として摂取し、血糖変動の是正を図るものです。

2. ○ 1日の指示エネルギー量にプラスして補います。

3. × 運動の途中で低血糖症状になったときは、吸収が速やかなブドウ糖、砂糖、ジュースなどを補いますが、運動前の補食には消化・吸収の遅い食品が適しています。

4. ○ 運動前の補食には消化・吸収の遅い牛乳、卵、チーズ、クッキーなどを用います。

5. × 4の解説の通りです。



研究会等のセミナー・イベント情報

 主催事業
 共催・後援事業
 その他

 一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワーク 第71回例会

 申込必要

テーマ：『糖尿病治療薬 update2021～新時代の経口血糖降下薬～』

開催日：2021年12月3日（金）19：20～21：00

参加方法：Zoomにて開催いたします

参加費：当法人会員 無料 / 一般 2,000円

申込：当法人ホームページの「セミナー・イベント情報」よりお申し込みください（12/3締切）

☆西東京糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位：4単位

☆日糖協療養指導医取得のための講習会

 参加費
無料

 オン
ライン

 今だからこそ考えよう！血糖トレンドと療養指導

 申込不要

開催日：2021年12月7日（火）19：00～20：30

参加方法：セミナープログラムに掲載の視聴URLよりご参加ください

☆西東京糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位：3単位

☆日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位＜第2群＞：0.5単位申請中

 参加費
無料

 オン
ライン

事務局からのお知らせ



事務局へのお問い合わせは当法人ホームページで常時受付けております。ご返信にはお時間をいただく場合がございますが、順次対応させていただきます。お急ぎの方は平日の10:00～12:00/13:00～16:00にお電話くださいますようお願いいたします。

《 1月より、2022年度年会費納入が始まります 》

2022年度の年会費納入が、1月11日（火）より始まります。

 会員継続される方は、ご自身のマイページにアクセスいただき、3月31日（木）までにご納入をお願いします。

お悩み解決 《マイページ Q&A》

Q. 認定番号って何ですか？

A. 認定番号とは、西東京糖尿病療養指導士の認定を受けた者に付与される、Lから始まる番号です。マイページには、「L番号」と掲載しておりますのでご確認ください。


 「L番号」が
認定番号です


発行元

 一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワーク事務局
 〒185-0012
 国分寺市本町2-23-5 ラフィネ込山No.3-802
 TEL:042(322)7468 FAX:042(322)7478
 https://www.cad-net.jp/
 Email:w_tokyo_dm_net@crest.ocn.ne.jp

編集後記


 遠距離通勤の電車内で本を読んでいます。重松清の小説「青い鳥」で、中学校臨時講師村内先生の言葉、「いじめはひとを嫌うから、いじめになるんじゃない。人数がたくさんいるから、いじめになるんじゃない。ひとを踏みにじって苦しめようと思ったり、苦しめていることに気づかずに、苦しんでいる声を聞こうとしないのがいじめなんだ。」重く響きました。今年も残り僅か、来年こそ良い年になりますように。
 （広報委員 馬場 美佳子）